

ヒメウスバシロチョウ

Parnassius stubbendorffii

アゲハチョウ科



ヒメウスバシロチョウ

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

名前の由来

ヒメは小さい、ウスバシロチョウは向こうの景色が透けて見えるような薄い色の翅をもつ白いチョウの意味と思われる。チョウという言葉はもともと「漢語」から取り入れたものである。漢字名：姫薄羽白蝶

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

草花
(在来種)

草花
(外来種)

哺乳類

鳥類
(水辺)

鳥類
(草原・樹林)
ワシ・タカ

特定種

該当なし。

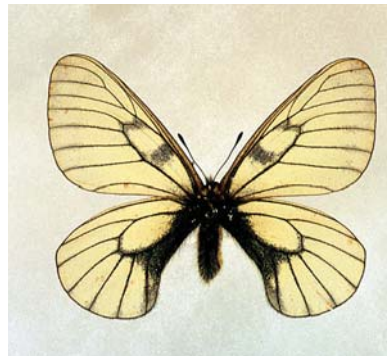
形態的特徴

一見シロチョウ科のチョウと見間違えるような白いチョウ。大きさはモンシロチョウ程度。オスの前胸背、胸部側面、腹部後半下面および後翅裏面に生じる毛は灰白色。メスでは胸部側面の黄色部の色調がやや淡く、交尾囊の

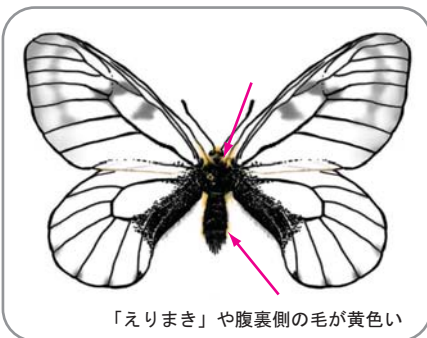
長さが一般に長く腹部の基部までのびる傾向がある。交尾後のものは腹端に大型の交尾囊をつけるので雌雄の区別は容易である。

類似種と見分け方

ウスバシロチョウ。
ウスバシロチョウのオスの腹部側面にある軟毛は橙黄色の毛束帯がある（ヒメウスバシロチョウは灰白色）。
頭部と胸部の境界部の軟毛は淡褐色（ヒメウスバシロチョウは灰白色）。
メスの交尾囊はやや小型（ヒメウスバシロチョウは大型で腹部の大半を覆う）



ヒメウスバシロチョウ。表（左がオス、右がメス）



類似種、ウスバシロチョウ。表
「えりまき」や腹裏側の毛が黄色い



ヒメウスバシロチョウ。ウラ（左がオス、右がメス）

チョウ標本：吉原利之氏作成・所蔵

生活サイクル

| | 4月 | 5月 | 6月 | 7月 | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 | 2月 | 3月 |
|-----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|-----|----|----|----|
| 卵期 | ■ | | | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ | ■ |
| 幼虫期 | ■ | ■ | | | | | | | | | | |
| 蛹期 | | ■ | ■ | | | | | | | | | |
| 成虫期 | | | ■ | ■ | | | | | | | | |

生育環境・分布

低山地から山地の溪流沿いの明るい林内。伐採地跡や林間空き地のも見られる。

分布：国外分布は、朝鮮半島、中国東北部、沿海州、アムール、アルタイ。国内分布は、北海道。北海道内分布

は、全域（根釧台地、渡島半島南部など一部の地域を除く）。

十勝地方では、産地は局地的だが産地における個体数は多い。

繁殖生態・寿命

年1回の発生。成虫は6月上旬～7月上旬に現れる。越冬は卵態。

母蝶は食草付近の枯葉や枯枝に1～数個づつ産卵する。幼虫は雪解け後いち早く芽を出すエゾエンゴサクの若葉にたどりつく。主に日中の気温の高い時に摂食し、それ以外は付近の枯葉上で日光浴をするか、枯葉の下に潜っている。ヒメウスバシロチョウとウスバシロチョウでは

この日光浴が成長に大きな影響を与えるらしく、飼育時に日光に当てないと成長が著しく遅れる。幼虫の体色が黒いのも体温を上げるためであると思われる。

終齢になると食べる量も増えるので食草を食いつくして次々と別の株へ移る。

蛹化時には枯葉の中に潜り込み、その間に多量に吐糸して繭をつくる。寿命：不明。

他生物との関わり

*エゾエンゴサクを食草とする。

*コンロンソウ、オオダイコンソウ、チシマアザミ、エゾアザミ、イボタノキ、ハシドイ、オオハナウド、ヨツバヒヨドリ、エゾフウロ、セイヨウタンポポ、アブラナなどで吸蜜する。

*天敵として寄生蜂の一種が知られている。

*終齢幼虫に寄生蝇の卵が産付されているのが報告されている。



エゾエンゴサク。ウスバシロチョウ幼虫の食草

幼虫の食性（食草）

エゾエンゴサク。

興味深い話

■蝶や蛾の翅には鱗粉と呼ばれる小さな鱗があり、その組み合わせによって色々な模様ができているが、ウスバシロチョウの仲間はこの鱗粉の発達が悪く、翅が透きとおった感じなのでウスバ（薄翅）という名となった。

■シロチョウと名前がついているがアゲハチョウの仲間である

■このチョウは初夏に成虫が現れるが、卵の期間が長く、卵のまま翌春まで過ごす。一年のうちほとんどを卵で過ごす、食草が春先にしか現れないため、卵は食草の根ぎわの枯茎や枯葉などに産み付けられる。

■ウスバシロチョウなどのアゲハチョウ科のオスはメス

が他のオスと再び交尾するのを防ごうと精子を包む精包(せいほう)を材料に栓をする(これを交尾嚢という)。ウスバシロチョウ類の交尾嚢は特に大きく、再び交尾することはほとんどないといわれる。またチョウのメスの生殖器は交尾をする穴と産卵する穴は別々になっているので、一方をふさがれてしまっても産卵には全く問題はない。

■ヒメウスバシロチョウとウスバシロチョウは十勝地方では一部産地が混生しているためまれに交雑種が確認される。

■十勝地方のアイヌ語では、チョウ類一般に「マレウレウ」という。

配慮事項

幼虫の食草であるエゾエンゴサクの自生地が必要。

参考文献

「原色蝶類検索図鑑」猪又敏男 北隆館 1990
「日本のチョウ」海野和男・青山潤三 小学館 1981
「原色昆虫大図鑑Ⅰ（蝶蛾編）」北隆館 1978
「北海道昆虫ガイド」北海道昆虫同好会 北海道教育社 1984
「学研生物図鑑 昆虫Ⅰチョウ」監修 白水隆 学習研究社 1983
「十勝の蝶」大和与三追悼集 十勝蝶の会 1993
「エコロン自然シリーズ 蝶・蛾」白水隆・黒子浩 保育社 1996
「虫のおもしろ私生活」ピッキオ編著 主婦と生活社 1998

「サハリンの蝶」朝日純一・神田正五・川田光政・小原洋一 北海道新聞社 1999
「北海道の蝶」永盛拓行・永森俊行・坪内純・辻規男 北海道新聞社 1986
「原色日本蝶類生態図鑑（Ⅰ）」福田晴夫・浜栄一 他 保育社 1982
「コタン昆虫記（4）チョウ篇」井上寿 十勝地方史研究所 1988
「知里真志保著作集 別巻Ⅰ 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類